書評

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編（2001）

『越境する知６　知の植民地：越境する』

東京大学出版会

桂文子

１．はじめに

本書は、「越境する知」のシリーズ（全六巻：「知の身体」「知の語り」「知の言説」「知の装置」「知の市場」「知の植民地」）のうちの一冊である[1)]。論文集であるため、一つ一つの論考は概説的にならざるを得ないが、専門領域を異にする研究者の研究成果が見渡せる点に本書の意義はある。とりわけ、学際的研究の必要性が叫ばれながら、依然他の研究領域の参照が容易ではない現状にあっては、「植民地」というテーマで異なる専門におけるオピニオンリーダーの論考を見渡せる意義は大きい。

また、本書はポスト・コロニアリズム研究の入門書としても役立つだろう[2)]。知の帝国主義がどのように編成されていくのか、どのような知の枠組みがどのような価値観や力関係を編み上げていくのか、感受性や言説がそれをどのように強化され、あるいは隠蔽されていくのかといった問題が読者に提示されている。また、帝国主義的イデオロギーを貫く論理構造は、反帝国主義的論考さえ足をとられてしまうほど強固なイデオロギーであることが指摘され、その構造を越えるために我々に何が可能であるのかが示唆される。

２．本書の構成

本書の配列は〔Ⅰ〕記憶と擬態の政治、〔Ⅱ〕まなざしの地政学〔Ⅲ〕闘争の萌芽という三部構成の中に各論文を配列している。論文数が多く、かつ各論文に有機的つながりをあえて持たせていないという本書の特性を勘案し、

変則的ではあるが私に論点を設定し、その問題意識を満たすために有効な論文を整理（重複がある）する形で構成の紹介にかえたい。

【ポスト・コロニアリズムとはどういう概念かを簡便に了解するために】

1「戦争の・植民地の知をこえて」酒井直樹

7「偽りのｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨへの権利—あるﾎﾟｽﾄ・ｺﾛﾆｱﾙの物語」ﾃｯｻ・ﾓｰﾘｽ—鈴木

【知の暴力性、オリエンタリズムと知の関係を整理するために】

3「反復する虚構—「日本民俗学」の現在」村井紀

5「知のオリエンタリズム」姜　尚中

9「文化の脱植民地化—ﾌﾞﾗｼﾞﾙ・ﾓﾃﾞﾙﾆｽﾞﾓのﾚｯｽﾝ」古谷嘉章

10「知の地方主義（ﾌﾟﾛｳﾞｲﾝｼｬﾘｽﾞﾑ）を越えて—新たなる普遍性に向けて」岡　真理

【分類・博物的知の持つ「力」について】

1「戦争の・植民地の知をこえて」酒井直樹

5「知のオリエンタリズム」姜　尚中

6「18世紀ロンドンにおける植物収集と『日本誌』」ﾀｲﾓﾝ・ｽｸﾘｰﾁ

【近代初期発祥の輸送技術がもつ「力」について】

2「植民鉄道の夜」川村　湊

8「性欲と石炭と植民地都市—『舞姫』再考」西　成彦

【感性の制度化と強化の作用について】

4「植民地体験と“内地人”—『アカシアの大連』をめぐって」川村邦光

なお、各論考とも「植民地の知」に関わるテクストを選んでそこに含まれる問題を析出するという執筆態度において共通している。そのうえで、各論者の問題意識や対象の特質に応じて、何が問題構造を見えにくくしているのか、あるいはそれを乗り越える可能性はどこにあるのかを示唆していくという方針が観察できる。こうした枠組みにおいて全体の共通了解が見て取れるが、各論考のスタイルや方法にばらつきがあり、あえて一つの言説に収斂しないという編集の意図を感じることができる。

3．本書の意義

本書の意義についても、各論考に即した考察を加える紙幅がないため、い

くつか論点を絞って指摘していきたい。

本書のなかでとくに目を引くのは、戦争責任について議論し、植民地主義を断罪する日本人研究者の語りの背後に、実は歴史修正主義者と同質の欺瞞と自己満足が隠されていることの指摘（「プロムナード」佐藤学 p.12-14）である。ポスト・コロニアル研究という名の下に、「現在を生きる無実の私」という位置に安住して過去の暴力を断罪する研究、テクストに潜在する暴力性を暴露するだけにとどまった研究が横行する現状にあって、「自慰行為（マスターベーション）の語り」という佐藤の言葉を重く受けとめるべきであろう。いかなる言葉も、発せられるやいなやある力を露呈し、ある関係を実体化させ、ある何かを排除して強固な一つの価値秩序を形成する。もちろんその言葉が、かりに抵抗のための言葉であれ、誠意ある言葉であれ、事情は同じである。その意味において、近代的知の制度に基づいて論文を提出する我々は、知の帝国を営々と築き上げていることを自覚すべきだ。学会や研究会で発表し、論文を作成し、授業を行うさなかで、自分は何を排除し何を隠蔽し何を押さえ込んでしまったのか。その自覚と問題意識がない限り、どんなに反植民地的発言を行おうとも、植民地化していく力の作用を乗り越えるどころか、植民地化生成過程を補強し続ける加担者として存在してしまうことを、我々研究者は心しなければならない。佐藤の発言は、我々にそう自戒を促す。

なお、日本語で書かれた近代文学を研究の対象とする私の関心領域に引き寄せて、最後にもう一点本書の意義をまとめておきたい。それは、知の言説、帝国の言説を相対化する装置として、文学（あるいは文学研究）の可能性が随所で語られている点だ。過去の出来事についての実証的な研究は、往々にして国家や行政がまとめた資料に頼りがちになる。文学テクストは作家個人の主観的記述であると同時に、同時代の風俗や感性が織り込まれている。その意味において文学は、権力者の側がまとめた資料がもつ陥穽を補完するメディアとしての価値をもつ。しかし同時に文学の、感受性に訴えノスタルジーに泥んでしまう特性が、隠蔽と強化の作用を果たしてしまうことも本書は指摘する。本書は、文学のもつ力を多面的にあぶり出しているのである。本書における多面性への志向は、文学論に限られていない[3)]。本書では、身体化した思考を行うことの重要性が随所で語られると同時に、身体化が帝国

／植民地的状況を自動化、自然化へと導いてしまうことの指摘も忘れない。「身体」について、諸氏が繰り返し言及することで、我々の身体が植民地化に対してどのように機能しているかが明らかにされているのである。

4．おわりに

ポスト・コロニアル研究はいかにあるべきか、どのように学際研究をまとめていけばよいかというアイディアを本書に求める読者にとっては、本書は穴だらけ矛盾だらけで方向付けに失敗した雑纂だと映ってしまうかもしれない。しかし本書評で繰り返した通り、ある論考で「語られた＝意味が生成された」ことも常に別の論考によってすぐに相対化され、「こうすれば帝国／植民地的関係を生産できる」といったわかりやすい答えに安住しない点に本書の特徴はある。ここにこそ、我々が言葉と学問が強固に持つ権力作用に絡め取られないための一つのヒントが隠されているように思う。この重要性が自覚できて初めて、「自慰行為（マスターベーション）の語り」から、我々は少しだけ抜け出す可能性を見出すことができるのではないだろうか。

註

1）身体と言葉と権力の編み直しを目指す本シリーズは、近代知の中にありながら言葉と権力の作動するあらゆる境界を越境し、近代知の編成を内から突き崩すべく挑戦している研究者を選び、問題群ごとの専門横断的な編集を行う点で特徴的である。各巻とも最前線で発言している執筆者を選びながら、かならずしも論文という表現形式にこだわっていない点も本シリーズの特徴である。問題群によっては必ずしも大学で研究を職業として行っていない人も執筆（ないしは談話）しており、研究者の見落とした問題を提起する。必ずしも各巻の論者の論文量や問題意識を統一せず、論者の問題意識の深浅さえも尊重する形で編集者の介入が比較的少ないのも特筆にあたいするだろう。

2）小森陽一、佐藤学による巻頭の「プロムナード・知の植民地をめぐる断章」は、各論考の要約の役割を果たすと同時に、単なる要約・解説の域を超え、これ自体が「知の植民地」化について考えるための入門としての役

割を果たしている。入門書として本書を活用する場合、各論考の意義や成果、全体の見通しを理解するためのガイドとして、「プロムナード」をまず熟読するのも一案であろう。

3）紙幅の都合上それぞれの論考に言及できないが、もちろん各論考には特筆すべき成果があると同時にさまざまな限界もあり、論考間のズレも大きい。しかし「何度も語り直す」実践が本書全体の大きな成果の一つであると考えるならば、本書を読む際、自分なりにある観点や言葉にこだわって横断的に読んでみるということをあえてすすめたい。もちろんテクストの読み方は強制すべきものではないが、書評であえて読み方を指示するという愚挙に出るのは、各論考のズレが単に寄せ集め論文集ゆえのズレや矛盾ではなく、むしろ対象を変えて何度も語り直すという実践の成果だと考えるからである。

(ZAN16617@nifty.ne.jp)